大同学院第17期生古川滋郎氏
インタビュー記録（上）

語り手：古　川　滋　郎
聞き手・解説：
佐　藤　仁　史，佐　藤　　量
菅　野　智　博，大　野　絢　也

【解説】

本記録は満洲国大同学院第17期生であった古川滋郎氏に対するライフヒストリー調査の主要部分である。以下では，聞き手による調査の経緯と，本記録が持つ意義について簡単な解説を加える。

聞き手の4人は「満洲の記憶」研究会において，約10年来聴き取り調査やエゴドキュメントをはじめとする関連資料の収集を進めてきた。その中で関係者から様々な情報が寄せられた。2021年10月，公益社団法人マスコミ世論研究所内戦場体験放映保存の会会員の木村陽子氏から満洲国の歴史に関する貴重な証言者がいるとの情報を提供されたことにより，筆者は古川滋郎氏の存在を知った。また，木村氏には紹介の労をとっていただいたばかりでなく，同氏が古川滋郎氏に対して行ったインタビューの抄録も併せてご提供いただいた[1)]。その後，2022年1月，3月，7月，10月に7回にわたってライフヒストリー調査を集中的に実施した[2)]。その成果の一部が以下のインタビュー記録である。

古川滋郎氏の略歴は次の通りである[3)]。古川氏は，1924年1月5日に札幌市において出生した。1941年4月に北海道帝国大学土木専門部に入学した。戦時下の緊急措置として本来の就学年限である3ヶ年が6ヶ月短縮されたため，1943年9月に卒業した。その際，大同学院での就学を経て満洲国政府に就職する方法があることを就職担当教官から教えられ，満洲国高等文官試験を受験し，満洲国に渡航することになった。

1944 年 2 月 1 日，大同学院に到着した。当時の在校生は 100 人程度であり，そのうち日本人学生は 70 人程度であったという。彼らの大半が行政官であったのに対して，古川氏は技術官であった。1944 年 9 月，海軍短期技術見習尉官として徴兵通知が来て海軍に入ることが決定したため，同級生より一足先に大同学院を卒業した。10 月 1 日に浜名海兵団に海軍短期技術見習尉官として入団した後，静岡県三島の海軍施設本部実験所における諸施設築造教育を経て，1945 年 4 月 1 日，青森県の大湊海軍要港部に着任した。その後，百石施設第 13 部隊に配属された。5 月 1 日に正式に技術少尉となり，そのまま敗戦を迎えた。8 月末日，札幌に帰郷した。かような経歴のうち，本記録に収録するのは大同学院卒業までの体験についてである。

なお，古川滋郎氏は大同学院における研修時とその前後の時期に記した日記を現在でも保管しており，筆者はそれらを閲覧する機会に恵まれた。1944 年 1 月から 9 月までの約 65,000 字からなる日記は，当時の学生生活の実態や在学時の生々しい感性の一端を伝えるものである。大同学院研究においては従来使用されてこなかった同時代の一次史料であるだけに，関連研究にとって重要な突破口となりうると考えられる。筆者は古川氏の許可を経て現在翻刻作業を進めており，インタビュー記録の完全版や関連情報と併せた記録集を刊行すべく作業を進めていることを附言しておきたい。

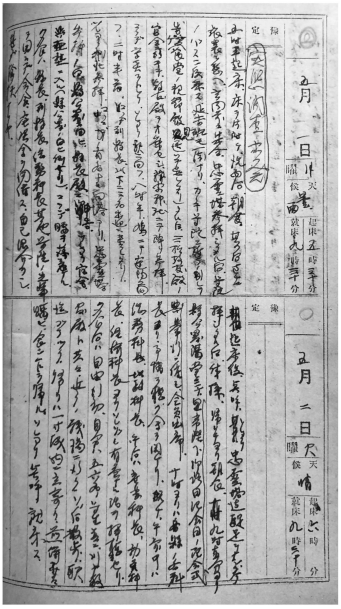

写真 1　古川滋郎氏の大同学院時代の日記

それでは古川氏が学んだ大同学院の概要について確認しておく。大同学院は，「官公吏或いは将来的に官公吏になる者を養成・訓練する場所」[4] として，1932 年 7 月に自治訓練所を基盤として長春に創立され

た。初代院長には国務院総務長駒井徳三が就任した[5]。修業期間は4ヶ月～1年とされ，現職官吏は在職のまま修業し，終業後に各官庁に任官した[6]。1945年に入学した全19期において3,661人の卒業生を輩出した。就職先は地方行政機関が多かった。

大同学院のカリキュラムは精神訓話，軍事教練，一般の講義，語学，地方実態調査旅行などからなり，また専門科目は，法律，土木，獣医畜産，農業などの実務科目が大半を構成していた。その実態はと言えば軍事教練が課されるなど，「完全に日本の士官学校の訓練」であったという証言もある。また，満洲国官吏による「王道思想」「一般国策」，各次長による財政，外交，司法，内政，国防などに関する講義科目などが大きな割合を占めており，卒業後直ぐの赴任に向けた実践的な訓練が実施されていた。日常生活についていえば，「塾」と呼ばれる寄宿舎に収容され，日本人，漢人，モンゴル人，朝鮮人，ロシア人などが共同生活をした。この点は，建国大学の塾と民族関係に関する議論を想起するが[7]，就学年齢や共同生活の時間，学校の性質の違いなどが，大同学院における民族関係にいかなる影響を及ぼしたのかは興味深い点である。

ところで，大同学院の存在は広く知られていたものの，戦後の長期間にわたって本格的な研究は行われてこなかった。このことは教育機関としての性質は異なるものの，建国大学に関する研究の進展とは対照的である[8]。この原因を考えると，大同学院が帝国主義的支配を実施する植民地官僚の養成機関であったことに対するイデオロギー的立場から，検討に値しないとアプリオリに考えられてきたこと，また関係者の一次史料が建国大学に比して圧倒的に少ないことなどが考えられる。最近では，台湾人海外同窓生に着目した論考をはじめとして林志宏によって一連の研究が進められるようになっているが[9]，依然として十分な検討が行われているとは言い難い。大同学院の実態を解明することは，華北の新民学院，蒙疆の蒙疆学院，汪政権の維新学院など日中戦争期の占領区や傀儡政権における類似した機関の理解に直接関係してくるため，欠くことのできない課題である[10]。

以下では，古川氏の口述記録から読み取れる大同学院による植民地官僚養成の特徴について2点概観したい。第1は農村実態調査旅行についてである。大同学院のカリキュラムには農村実態調査旅行が重要な一環

として組み込まれ，終了後地方の実情を学院に報告させていたことは夙に知られてきた。大同学院在学生による農村実態調査がどのよう方法で行われたかについては，満洲帝国大同学院編『集計表一覧――一般戸別調査集計表：選擇戸別調査集計表』や満洲帝国大同学院編『満洲農村社会実態調査報告書』などから窺い知ることができる[11]。こうして行われた各地における調査内容を集約したものが，『満洲国各県視察報告』である。かような調査旅行の意義について，短期間で実施されたため不完全であるが，「社会的に演じる重大な役割と功績」があると大上末広は評価していた[12]。『満洲国各県視察報告』の「発刊のことば」によれば，調査旅行は「調査実習」であり，その目的は実際に地方の事務に触れ，卒業後に地方官に任官した際に役立てるという，いわばインターン的役割を持っていた[13]。

古川氏のインタビュー記録や日記からは，農村調査実態旅行が実際にどのように行われたのかについて具体的な状況を知ることができる。古川氏は約 20 名からなる遼陽班に参加し，鉱山の近くに位置した桜桃園村において調査を実施した。口述調査によれば，班はさらに 8 つの組に分かれ，古川氏は言語上の便もあって矯全忠という漢人の学生と組んだという[14]。1944 年 5 月 5 日に始められた農村訪問ではまず村公所に赴いて牌長と顔を合わせている。調査初日の印象として，「一般ニ此辺リ農家ハ貧シクシテ，農業ヨリモ鉱山労務者（桜桃園採鉱所）ガ多キ事ナリ」と述べている点は，現地農民が家庭内労働力をどのように効率的に分配していたのかを端的に示すものである[15]。

ところで農村実態調査が実施された環境として挙げなければならないのが，警察や軍によって警護が施され，現地の案内役が配置された点である。治安が安定した遼陽での調査であったが，調査後通化を経て吉林へと移動する際には治安上の懸念から急遽警備隊による護送が行われた。この点について日記（6 月 3 日）は「途中，省警備隊トラツク追カケ来リ，我等ヲノセテ駅迄行ケリ」[16] と記すのみであるが，それが「省公署の方が見えられて，大同学院の学生が相当の数が来ていることを内通する職員がいると告げられました。内通というのは山の方に逃げ隠れている人たちと連絡をしている者がいたということです。それで，もう 1 泊したならば，あるいは何か起こるかもしれない」という情況であった

ことが口述調査によって判明した。

第2は，土木技術者の養成についてである。満洲国では1937年から開始された第1次産業開発五ヵ年計画において，鉱工業や土木，交通部門などの産業開発と技術者の養成が国策として推進された。鞍山や撫順をはじめとする鉱工業産業の拡大，水豊ダムや大東港，哈大道路の建設などはその代表例であった。また，大同学院をはじめとして建国大学，旅順工科大学，南満工専などの高等教育機関における人材養成もかような「開発」を支えることが求められていた。

元来満洲開発は，労働者の大部分を現地の中国人に依存し，技術者は日本内地からの派遣に頼ってきた。しかし1937年の日中戦争勃発によって，日本内地においても軍需生産力拡充のため技能者が必要とされはじめ，満洲における技術者不足が顕在化し，技術者の確保が喫緊の課題として浮上した[16)]。1941年には満洲国政府交通部内に満洲土木学会が設立された。同学会誌『土木満洲』の「発刊ノ辞」において佐藤慶次郎会長は，「大陸満洲に於ける要請たる国土開発重要諸建設は総て土木技術者の手に依らざるべからず」と述べており，満洲開発における土木技術者の重要性が指摘されている[17)]。

土木技術者の確保が求められるなか，古川氏のように日本内地で土木技術の高等教育を受けた人材は貴重であった。古川氏は北海道帝国大学での修学経験について，「専門については，セメントや木材の強度だとか，コンクリートの製造の仕方だとか，橋梁の設計の計算やダムの設計とかを学びました。それから水流の理論に関する流体力学や鉄道についても学びました」「最後の卒業設計ではプレートガーダー鉄橋を研究し，鉄橋を計算して図化するという内容でしたね」と述べているように，非常に幅広い分野を学んでいた。土木の需要が高かった満洲において，北大での経験が渡満後も役立ったことがうかがえる。

また，大同学院では様々な土木開発現場の調査実習を行なっていた。その時の様子について古川氏が「農村実態調査以外に，ある旅行の中で施工中のダムを見学した時がありました。これは土建班の旅行でして，そこで苦力の問題，私たちのいうところの労工問題を扱いました」と述べているように，土木技術面のみならず現場の労働者についても学ぶことが学生には促されていたようである。古川氏の語りは，大同学院では

土木技術の専門知識に留まらない植民地官僚としての実務を現場において体験することが求められていたことを端的に示している。

註

1) 古川氏に依れば，古川氏と鈴木氏は大同学院同窓会の慰霊祭が毎年行われる京都の慈雲院で 2015 年の秋に出会い，2016 年 3 月に鈴木氏が札幌にある古川氏の自宅に赴いて聞き取り調査を実施したという。その時の記録である木村陽子「古川滋郎氏訪問記録」(2016 年 3 月 3 日訪問，未定稿）を木村陽子氏よりご提供頂いた。記して謝意を示したい。
2) 古川滋郎氏へのライフヒストリー調査の日程と参加者は次の通りである。第 1 回聴き取り調査(調査日：2022 年 1 月 16 日, 聞き手：佐藤仁史, 佐藤量，菅野智博，大野絢也)，第 2 回聴き取り調査（調査日：2022 年 3 月 10 日, 聞き手：佐藤仁史, 菅野智博), 第 3 回聴き取り調査（調査日：2022 年 3 月 11 日，聞き手：佐藤仁史，菅野智博)，第 4 回聴き取り調査（調査日：2022 年 7 月 28 日, 聞き手：佐藤仁史, 菅野智博, 甲賀真広)，第 5 回聴き取り調査（調査日：2022 年 7 月 29 日，聞き手：佐藤仁史, 菅野智博, 甲賀真広), 第 6 回聴き取り調査（調査日：2022 年 10 月 29 日，聞き手：佐藤仁史，大野絢也)，第 7 回聴き取り調査（調査日：2022 年 10 月 30 日，聞き手：佐藤仁史，大野絢也)。
3) 木村陽子「古川滋郎氏訪問記録」。
4) 国務院総務庁編『満洲国政府公報』第 23 号，1932 年 7 月 11 日。
5) 「井上中将赴任ノ件（陸満密受第 269 号)」アジア歴史資料センター，Ref：C02003051100。
6) 創立 70 周年記念出版委員会編『物語大同学院：民族共和の夢にかけた男たち：創立 70 周年記念』大同学院同窓会，2002 年，38–39 頁。
7) 宮沢恵理子『建国大学と民族協和』風間書房，1997 年，177–241 頁。
8) 建国大学については宮沢前掲書以外にも，山根幸夫『建国大学の研究――日本帝国主義の一断面』汲古書院，2003 年，Yuka Hiruma Kishida, *Kenkoku University and the Experience of Pan-Asianism: Education in the Japanese Empire,* London and New York: Bloomsbury Academic, 2020，がある。また, 三浦英之『五色の虹――満洲建国大学卒業生たちの戦後』（集英社, 2015 年）はルポタージュではあるが, 世界各地にある卒業生の「生の声」が拾われていて興味深い。
9) 林志宏「冷戦体制下における大同学院同窓会――日本と台湾の場合」佐藤量・湯川真樹江・菅野智博編『戦後日本の満洲記憶』東方書店，2020 年, 林志宏「重建合法性――満洲国的地方調査, 模範村及其『教化』」

『中央研究院近代史研究所集刊』第117期，2022年など。

10） 日本の植民地官僚の比較研究については以下を参照されたい。岡本真希子『植民地官僚の政治史――朝鮮・台湾総督府と帝国日本』三元社，2008年，松田利彦・やまだあつし編『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』思文閣出版，2009年。また，許雪姫（羽田朝子・殷晴・杉本史子訳）『離散と回帰――「満洲国」の台湾人の記録』（東方書店，2021年）第4章「満洲国官僚体系の建設と台湾人官僚」も興味深い分析を行っている。

11） 満洲帝国大同学院編『集計表一覧：一般戸別調査集計表：選択戸別調査集計表（康徳2年度）』（満洲帝国大同学院，出版年不明）や満洲帝国大同学院『満洲農村社会実態調査報告書』（満洲帝国大同学院，1936年）など。

12） 大上末広「『満洲国各県視察報告』を読む」『満洲評論』第6巻第12号，1934年。

13） 「刊行の辞」大同学院図書部委員編『満洲国各県視察報告』新京，大同学院，1933年。したがって，満洲国国務院実業部や臨時産業調査局が行った農村実態調査とは性質や調査精度が大きく異なるものと捉えるべきである。長岡新吉「『満洲国』臨時産業調査局の農村実態調査について」『経済学研究』第40巻第5号，1991年，江夏由樹「『満洲国』の農村実態調査」『日本大学文理学部情報科学研究所年次研究報告書』第6号，2006年。

14） 大同学院第17期生文集編集委員会編『旺なる我等――大同学院第17期生文集』大同学院第17期生会，1983年，264–266頁。

15） 『古川滋郎大同学院日記』1944年5月5日。菅野智博「分家からみる近代北満洲の農家経営」『社会経済史学』第83巻第2号，2017年。

16） 満洲国史編纂刊行会編『満洲国史　各論』満蒙同胞援護会，1971年，566頁。

17） 佐藤慶次郎「発刊ノ辞」『土木満洲』第1巻第1号，1941年，1頁。

【インタビュー記録】

1．満洲渡航までの経緯

家族

問：古川さんのご両親はどのようなお仕事をなさっていたのですか。

答：私の父は青森県津軽の農家の次男でした。昔は中里村と言いまして，今は何とか町に編入されているようですけれども昔は中里でした。

問：津軽中里と言いますものね。

答：私の想像するところでは，父は結局，家の跡を継げないものですから，知り合いを通じて北海道に渡ったのです。私は，道南の伊達市の奥，幌別というところの出身です。そこには硫黄鉱山がありまして，鉱山株式会社の社宅で私が生まれたのです。私が生まれて間もなく，父の定年間際だったと思いますが，一家で札幌に出てきました。鉱山会社の本社が札幌だったらしくて，父はそこにしばらく勤めてから退職しました。その後は自由業という形でやっていました。

問：ご両親ともに津軽の出身ですか。

答：母は幌別出身ですけれども，祖母はもともと名古屋辺りにいたらしいです。ですから，私の血統は青森県と愛知県の２つに遡るということになります。愛知県の方の血統は，さらに遡ると関西の小豆島のお城勤めをしていたというような話も聞きました。私の曾祖母ぐらいの話です。けれども，母の家系の詳しいことはよくわかりません。

ところで，大学での担当教授先生から勧められて私が満洲に行ったように，満洲とは色々な縁がありました。実は私の父が日露戦争に参加しているのです。大同学院の井上院長閣下[1]も別の部隊でしたけれども，やはり日露戦争に参加しているのですね。このことはあとでわかったことですけれども，何か因縁があったと感じております。

もう１つ逸話があります。大同学院在籍時に参加した農村実態調査では，1944 年５月はじめに出発して以降，南下途中の２日目か３日目にかに通過した集落に黒溝台という地名があることを知りました。この黒溝台という地域で日露戦争の時にロシア軍と対戦したと父は言っていました。彼は「自分の正面は実際には負け戦だった」とぽつりと呟いていました。日露戦争には色々な経緯はありましたよね。「勝った，勝った」とは言っていましたけれども，小村寿太郎が苦労したりするなど，色々なことがありましたね。このようなことがありましたので，満洲とは何か縁が繋がっているのかなという感じがしましたね。

問：古川さんは何人兄弟ですか。

答：10 人兄弟です。母は 16 歳ぐらいで嫁いできたらしいですよ。昭和の初めから産めよ増やせよという時代に入りましたからね。あの頃

は何となく軍備を増強しなければならないという風潮がありまして，私の時代にはまさにたけなわでありました。1943年の8月にはアッツ島での玉砕がありました。それで私たち学生は，白い布で包んだ箱を持って札幌市内を慰霊行進しました。そういう時代でしたね。

問：古川さんは10人兄弟の何番目だったのですか。

答：確か5～6番目でしたね。幼くして亡くなったのもいました。肋膜炎になったり，40度ぐらいに高熱が出て脳膜炎とかになったりたりして，2～3歳で亡くなったのもいました。考えてみると，1ダースぐらい産まれたのではないかと思います。私は真ん中ぐらいですから，3男9女ということになるのでしょうかね。どこも子どもさんは多かったですけれども，1ダースと言ったら当時でも珍しい方でしたよ。

問：鉱山会社の社宅でお産まれになったということなのですので，お父さまは鉱山会社に勤められていたのですね。

答：はい。しかし父は偉い役ではなく，鉱山会社の事務所で机の仕事をしていました。当時は公的な仕事として在郷軍人に関連する活動をしていました。日露戦争後に在郷軍人になりましたからね。日露戦争では下士官の一番上位の曹長を務めました。原隊復帰後，勲功により金鵄勲章を授賞しました。その後，特務曹長，つまり戦時中の准尉にあたりますが，そういう地位に至っていました。軍の規定により現役を退いてからは北海道に渡り，幌別の在郷軍人の役員を務め，様々な会合に出席していたようです。札幌に出て来ましても，同様な役員を務めておりました。

大学入学から渡満までの経緯

問：古川さんは，北海道帝国大学土木専門部を卒業なさっていますよね。どのような経緯で土木を専門にしようと思ったのですか。

答：何ら深い考えがあったわけではないのです。生活が豊かな家庭ではありませんでしたから，札幌一中を卒業した後，教員になるために師範学校に入ろうと思ったのです。そこで2年間ほど勉強して小学校の先生にでもなろうかなと考えました。なぜならば，あの頃は師

範学校では学費があまりかからなかったようでしたから。

しかし，北大の学生会館に私の父と同じ在郷軍人であった大塚さんという方がおりまして，度々，在郷軍人の集まりで父とお付き合いをしていました。その人が，卒業前の２月頃――入学は４月ですが――に訪ねて来られて，師範学校に行くのではもったいないとおっしゃったのです。北海道帝国大学土木専門部[2)]は，開拓時代の農学校に併設された土木工事を勉強する部門でした。「北海道の開拓に貢献した先輩が在籍していたところなので常に就職もよく，社会に定着していて評判が良いし，それほど学費もかからないから，お父さん，少し頑張って３年間勉強させたらどうですか」と口添えしてくれたのです。私の成績なら受かるであろうとおっしゃったので，父母もそれではということで，「じゃあ，お前，北海道帝国大学の試験を受けてみなさい」と言われたので，受験しました。これが入学の経緯です。

問：当時の北海道では，開拓に関係する土木の需要は非常に高かったのですか。

答：私が大学を卒業した戦時中には本当に仕事もなくなって，壊れた木橋を直したり，穴凹のところを直したり――馬車道のような舗装なんかもありませんでしたから――，そういう仕事しかなくて，専門の仕事に関する募集枠はありませんでした。私は道庁や市役所など地元の役場に入ることを希望していたのですが，募集枠がなかったのです。これに対して，明治・大正時代の先輩方は仕事もあって，小樽の港湾なども大先輩が設計・施工されたものでした。名前はちょっと思い出せませんが，有名な全国的に知られた大先輩です。この方は，日本全土あちこちの道路，橋梁，トンネル，港湾，漁港などのインフラの仕事をされたようです。

問：入れないという理由とは何だったのですか。

答：要するに，募集枠がなく，採用しなかったのです。つまり仕事がなかったのです。そういうところにお金をかける費用がなくて，何事につけても軍事関係優先でしたね。若者はみな兵隊に行くのだというご時世であり，世の中全部が戦時色でしたね。

当時の私の日記にも書かれていますが，「どっちみち自分も兵隊

に行くのだ，一度は満洲に行くけれども，どうせ徴兵にかかって関東軍に入るか，あるいは別な場所に派遣されるのだ」と覚悟していました[3)]。あの頃，海軍では海軍短期技術候補生[4)]を募集しておりました。短期現役見習い技術尉官の募集がありましたので，卒業するときにはその試験を受けていました。だけれども，体調をちょっと悪くしましたので診断書を持って海軍武官室に行きましたら，幹部の方が，「ああ，そうか，君はこの試験に受かっていて，10月1日に東京に来いという電報をもらっているが，体調が悪いのであれば，来年になってから出直しておいでよ，記録しておくから」という回答がありました。このような経緯があって満洲に渡ることができたのです。満洲国でも一応海軍技術見習いの試験がありました。試験官は海軍中佐殿でしたけれども，「実は，これこれしかじかで昨年受かっていました」と言ったら，「ああ，そうか」と丸印を付けまして，「もういい，帰ってよろしい」とおっしゃって試験は終わりました。

その後，大同学院卒業後の1944年10月1日に海軍に入隊しました。静岡県の新居浜という小さな町に新居町駅があるのですけれども，駅前通りを真っ直ぐ数百メートル行ったところに海兵団がありまして，そこの教育隊に入りました。教育隊には相当の人数がいました。私は施設係となりました。そのときにはいろいろな理工系の大学や専門学校から海軍短期技術候補生の尉官候補生が集まって来て，海軍軍人としての訓練を受けました。

問：先ほど大同学院時代の日記について言及なさっていましたが，どんなことが書かれているのですか。

答：中身は，元旦に母親と一緒に行った神社参りだとか，大同学院のことなどです。大同学院では色々な訓練を受けましたけれども，卒業後はどっちみち兵隊に行かなければならない，関東軍だろうが海外に行こうが，どちらにしても海軍短期現役見習い技術尉官には受かっているのだから軍隊には行くことになるのであろう，そして国のために入隊することが自分の生きがいだというような内容が書かれています。当時の私にとって軍隊に行くこと，命をかけることという点が持った意味は大きかった。ところが，私は体があまり丈夫でな

かったので，訓練を時々休んだりしていたことも日記に書かれています。病気ではない時にも体は気を付けていました。このような状況であったので，本当は弱い気持ちの若者だったのです。当時「生長の家」というのがありまして，そこの本を長兄から譲ってもらっていました。それを満洲にも持って行きましたから，暇なときに夜読んだりして，読書の感想も日記に書かれています。日記を改めて読み直しますと，卒業後の入隊のこととか，生命の意味とかをめぐって，色々な気持ちが若者の１人の中で揺れ動いていたさまが伝わってきます。こういう状態で満洲国時代を過ごしていたのですね。

北大で学んだ土木技術

問：北海道帝国大学土木専門部で学ばれたのはどのような技術でしたか。

答：1年生の時は英語も習いましたし，公民のような内容もありました。それから地質学がありました。専門については，セメントや木材の強度だとか，コンクリートの製造の仕方だとか，橋梁の設計の計算やダムの設計とかを学びました。それから水流の理論に関する流体力学や鉄道についても学びました。

問：鉄道についてもお学びになったのですね。

答：ええ。日本では 1,067 mm という狭い軌道ですけれども，朝鮮から向こうは標準軌でしたね。標準軌といえば，満洲では「はと号」にも乗ったこともありました。鉄道については，パンタグラフをはじめとする架線関係など，多方面にわたって学びました。

問：土木専門部では広範にお学びになったのですね。

答：非常に広い範囲だったのです。それから機械・燃料，上下水道についても学びましたね。もちろん製図は不可欠でした。

問：上下水道などのインフラですね。

答：インフラですね。考えられるものは，夜遅くまでほとんど詰め込まれました（笑）。

問：古川さんはその中で特定の専門をお持ちであったのでしょうか。それともまんべんなく御学びになったのですか。

答：まんべんなくやりました。最後の卒業設計ではプレートガーダー鉄橋を研究し，鉄橋を計算して図化するという内容でしたね。

問：卒業設計では実際に設計をなさったのですね。

答：ええ。鉄道橋を設計しましたね。鉄道橋は今では別な形のものがありますけれども，昔は鉄板で作りましてね。それから，トラス橋の設計・計算，製図をしたこともありました。

問：本来の就学期間は3年であったのが，実際には就学2年半で，6カ月早く卒業されましたよね。ここにも当時の戦争の状況が色濃く反映されていますね。

答：そういうことです。戦時中で3年のところ，2年半に詰め込まれましてね。その2年半というのは，決して内容を簡略化するわけではなくて，金曜も土曜も暗くなるまで勉強させられましたよ。無理やり勉強させられて，へとへとになりながら卒業しました。卒業生の多くは陸海軍に行きました。私も在学中には満洲に行くつもりは全然頭にありませんでした。

問：それは土木専門部ばかりではなくて，他の学部でも同じような状況でしたか。

答：当時の学生は戦時学生制度のもとにありました。つまり「早く戦線の先頭に立って命を散らせよ」という時代でしたね。いい言葉ではないですけれども「学生が先頭に立て」と，短期間で訓練を受けましてね。みんなそういう時代におりました。

同級生は27名卒業しました。土木専門部は1学年定員30名で，全学年では90名でした。私の同級生27名のうち6名が戦死し，21名しか帰ってきませんでした。その6名のうち，1名は海軍少尉として沖縄に行き，特攻しました。特攻後に海軍大尉となりました。彼は東京の明治学院中等部を出まして，札幌や北大に憧れて札幌に来て，私たちと一緒に勉強しました。小柄でしたけれども面白い明るい性格で，東京の実家は柔道や剣道など武道の道具を売っていたと思います。あとは，沖縄の地上戦では2名の同級生が戦死しております。

それから，同じクラスからは私と一緒に大同学院に入った者が2名おりました。そのうち1名は私が日本に帰国する際に新京駅まで送ってくれた者ですけれども，その時「実は明日から関東軍司令部に毎日通うことになったのだ」と言っていました。「ロシア語の特

訓を受けるのだ」と言うのです。大同学院を卒業した若者には，そういう者が毎年２～３名いたらしいです。彼はそれ以来，行方不明になっています。

問：それが木村さんからいただいた資料に書いてある野島さんという方ですか[5)]。

答：そうです。

2. 大同学院受験と研修

大同学院入学の推薦と面接

答：話が飛びますけれども，私は大同学院では技術官でした。満洲国の官僚には行政官とか，医官とか，色々な種類の官がおりましたけれども，私は技術官として満洲国総務庁の方から辞令をいただきました。

問：なるほど。そういうことだったのですね。

答：4 月 12 日に受けた講義の中に，技術官と行政官とは互いに理解し合わないといけないという担当教員の言葉があったことが印象に残っています[6)]。ところで残念に思っているのは，私の大同学院への到着が遅れてしまったため，授業が始まった最初のひと月ばかり，本当に大事な講義を聞くことができなかったことです。

問：当時，大同学院に入るのに大学の教授の推薦がありましたよね。

答：私の受験に際しては林助一という大先輩の推薦がありました。学科試験はありませんでしたが，総務庁の参事官のような方が来られて――名前はちょっと忘れましたが日本人です――駅前の旅館の２階の大きな部屋で色々なことを聞かれました。生い立ちから専門的なことまでです。専門の内容については，橋の作り方だとか，ダムの設計だとか，鉄筋の強さや木材の強さといった内容でした。それらには全てに模範解答があって，試験官はそれを見ながら私がどんなことを勉強していたのかを確かめていたのだと思います。40 数分の面接のうち半分は専門的な質問でしたね。

問：面接をした参事官の名前はご存じないですか。

答：ないですね。お名前を聞くわけにもいかなかったし（笑）。

問：技術面のことをたくさん聞かれたとおっしゃいましたね。

答：技術のことを聞かれましたね。今申し上げたように，この試験官はどうやって勉強されたのかということを当時も不思議に思いました。やりとりをした感じでは彼は土木技術官ではなく普通の行政官のように見受けられたからです。それで，彼のことをちらちらと見て観察したところ，試験官は模範解答らしいものを見ながら質問していました。

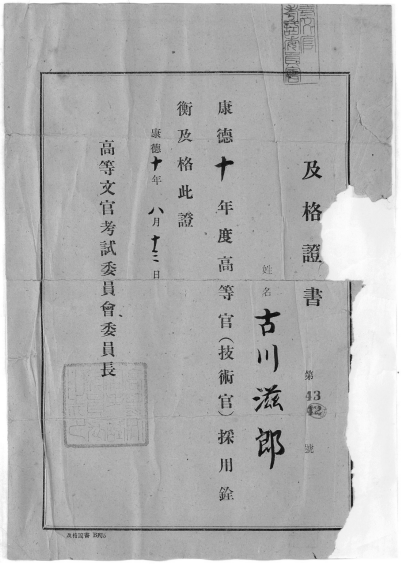
及格證書
第43號
姓名 古川滋郎
康德十年度高等官（技術官）採用銓衡及格此證
康德十年八月十三日
高等文官考試委員會委員長

写真2　満洲国高等文官試験の合格証書

満洲での土木技術の需要

問：当時の満洲では，土木の需要が多かったのですか。

答：水豊ダムや豊満ダムなどがありましたよね。哈大道路も重要な工程でした。私も哈大道路を見に行ったことがあります。営口に行った時には路盤が出来ていたのを目撃しました。道路幅が広くて25メートルくらいありましたが，その時には舗装はまだ出来ていませんでした。その頃は船を軍にとられてしまって，日本本土から舗装の材料が来なかったものですから，路盤は出来ているのだけれども舗装材が来るのを待っているというのが技術係官の話でしたね。また，その方は哈大道路はドイツのアウトバーンに匹敵する道路だと言っておりましたよ。

問：アウトバーンに匹敵していたというのは興味深いお話ですね。

答：新京や大連付近では路盤はところどころ完成していましたが，繋がってはいませんでした。哈大道路ですから大連とハルビンの間でした。

問：相当な距離ですね。

答：哈大道路は相当前から計画はされていまして，着工していた部分もところどころにあったと思います。私は，そのうち2カ所ぐらい見

学させていただきました。

問：そうすると，哈大道路をはじめとするインフラ整備のための技術員や技術官に対する需要が満洲国では非常に高かったと考えてもよいですね。

答：ええ。そういうことですね。

問：北海道帝国大学で学ばれたことは，古川さんが満洲に渡って任官してからも結構役に立つ可能性があったわけですね。

答：はい。当時，私は「戦争が終わって，もし満洲国が依然として存続していれば満洲に帰ってきて，勉強しながら道路でも橋でも，少しでも作りたいな」と思っていました。私が執筆した「南嶺日記」には，最後に「ナツカシ新京駅ヨ，暫ラクハサラバ」と書いてあります[7)]。

問：北海道帝国大学で学んだ土木技術は，他大学出身の方が学ばれて内容と比べて何か特徴があったのでしょうか。例えば，寒冷地である北海道の気候に合わせた技術とか，そういったことも重点的に学んだりしたのですか。

答：確かに北海道は冬になると地面が凍りますよね。ですから寒冷地の勉強もいたしました。構造物の場合は，冬は，例えば札幌だったら地下何センチ以下から基礎を作らなければならないとか，こういったことは国の方針で制度として決まっていたはずです。札幌と旭川と稚内では，気候には零下の差がありますけれども，北海道全体としては全部一律だったかもしれません。あるいは場所によって深度の数値が違ったかもしれません。当時の制度に即して私も寒冷地対応の技術も勉強しました。

　地球の緯度でいきますと，札幌と新京とは１度違っているかどうかなのです。そういうことも含めて色々な共通性があるように思えたから，「では満洲に行ってみようかな」という気持ちになったことも多少はあったかもしれません。全国の若い人たちも，様々なことが複合的に頭によぎって満洲に行ったり，北支に行ったりしたのだと思います。当時は華北交通もありまして，北京の方に行っている人たちもおりました。

問：北大から満洲や北支へということですか。

答：はい，だから私も満洲に行ってみようかなという気持ちになりまし

て，「じゃあ，先生，よろしくお願いします」というような形で大同学院の入学試験を受けました（笑）。

渡満前の研修

問：満洲に渡る前に1週間ほど研修をされましたよね。先ほど御殿場での研修の写真をみせていただきました。ここではどのような研修を受けられたのですか。

答：研修では本当の勉強はおろそかにされていました。朝から晩まで天突き体操だとか，朝に広場に集まっての乾布摩擦だとかの訓練が行われました。それから水垢離もありました。「入れる者は入れ，入りたくない者は水を被れ」とね。座禅や面壁ではなかったのですけれども，正座して，30分ぐらい瞑想にふけるとか，精神修養のようなことをさせられましたね。正直に言って，その時，私はとんでもないところに来たなと感じました（笑）。

その後，教官に引率してもらって，みんなで東京に出ました。1日か2日，みんなと一緒に行動を共にしました。そこで，私は合わなかった靴で右足のアキレス腱を痛めてしまい，みんなと行動できなくなってしまいました。そこで洗面器を手配して2日ぐらい水で冷やしたのですけれども全然治らなかった。その様子を見て教官が，「古川学生，しばらく故郷に帰って治しておいで。待っているからね」とおっしゃられました。

それで札幌の自宅に帰りました。1943年11月中頃だったでしょうかね。日記にも書いてあります。その後，正月を過ぎてから単身満洲に渡りました。1944年2月5日だったでしょうか，門司から連絡船に乗って釜山に着いた後，「ひかり号」という標準軌の列車に乗りました。単身であったので少し心細かったのですけれども，私のほか2～3人の若い人がやはり新京のどこだかの学校に入るとかで同乗していたので，友達になって過ごすことができました。新京に着いて，お腹が空いたから駅の食堂に入りました。確かヤマトホテルでしたが，立派なホテルだし，食堂で食事をしたら高いだろうなとひやひやしていたのですけれども，案外安かったのですよね（笑）。

問：そうなのですね。

答：いや，びっくりしましてね。日記にも出てきますが，日曜日には外出すると時々，友達と一緒に満鉄さんが経営しているヤマトホテルの食堂に行きました。

問：何を食べたのですか。

答：うどんだとか，親子丼だとか普通のものです。案外，安かったのです。「ここは高いところかもしれない。だけれども１回入ってみよう」と入ってみたら，意外に安いので驚きましたね（笑）。日記に当時の収支表が書いてあります。途中で終わっていますけれども。

問：４月，５月，６月，７月の分がありますね。大同学院時代はメモされていて，軍隊に入ってからはどうだったでしょうか。

答：残念ながらつけていませんでした。

写真３　満洲国総務庁高等官試補の任命状

渡満前後の満洲の印象

問：古川さんは満洲に独りで渡ったため心細い思いをしたとおっしゃっていましたね。当時，満洲に行くときに事前に日本で関連書を読んで予備知識を蓄えておいたとか，旅行ガイドのような本を買ったとかということはありましたか。

答：そういうことはないです。実は，満洲までの中継地として，東京の蒲田に私のおじの家がありました。鉄道の切符はすぐ買えない時代

でしたから，明日の切符というわけにはいきませんでした。2～3日後なら下りてきますけれども，そういう時代でしたから，そこでおじの家に1泊か2泊してから満洲へと向かいました。本土に帰ったときも必ずそこへ寄りました。つまり，ワンクッションおいて札幌の自宅へ帰ったということです。海軍に入隊するときも一旦東京に行き，そこで「おじさん，これから海軍の兵隊になりますよ」と一晩は厄介になりました。

あの頃は食事券を持っていないと配給も何もされませんでしたから，必ず食事券を町内会の役員さんからもらって持ち歩いていました。お米も靴下に入れて旅行したこともあります。そして，おじさんの家でも「私の分です，これで1つご飯を炊いてください」と言って渡しましたよ。

問：満洲に渡る前には，満洲あるいは満洲国に対して，どういった印象をお持ちでしたか。

答：何て言うのでしょうかね，旧制中学時代の話になりますけれども，張作霖爆破事件とか張学良だとかいった中学の先生が公民のときに話してくださった内容の印象が深かったです。徐々に戦争へと向かっていて，実際に戦争が始まったら一体どうなるのだろうと感じていました。旧制中学時代はお小遣いもなかったから，本屋に行っても，これだけは最低勉強しなければならないというような幾何学の本を買ったぐらいで，世の中について書いた本などは買う余裕がありませんでした。あの頃の中学生の仲間たちは，何となく「これからどうなるのだろうな」という気持ちでしたからね。このような状況の下，「満洲とはどんなところなのだろうな，これからどうなるのだろうな」と期待しつつ，雲行きが怪しくなってきたなとも感じておりました。あのときの十数歳の中学時代の子どもたちはそうだったのです。

その中で成績のいい元気な者は士官学校などを受けましてね。毎年，何人か私の学校から合格する者がおりました。軍服を着た先輩も学校に来まして，学校側に檄を飛ばしました。後輩に「おい，君たちも士官学校に来いよ」と声をかける先輩もいたようです。それから，学校には配属将校である陸軍少佐がいたことを覚えています。

この方は確か太平洋戦争で戦死したと思います。また別の配属将校には陸軍少尉の方や中尉の方もいましたね。軍事訓練も正課で，体調が悪いときは見学ということで良かったのですけれども，必ず単位を取らなければならないという時代でした。このように，学校の中まで軍事色に染まっており，何となく空気が淀んだ，不安な時代でしたね。

問：満洲に着いた直後はどのような印象を持ちましたか。

答：とにかく「こんなところなんだな」と思いました。民族共存と概念を最初は理解せぬまま行きましたからね。大同学院に入って，「なるほど，こういうことを学ぶのだな，心身ともに学ぶところなんだな」ということをわかったような気がしました。1 人の若者が飛び込んでいったという感じでありましたよ。

問：満洲に行く前は，五族協和などの方針を聞いたことはありませんでしたか。

答：ちらっとは聞いていましたけれどもね。それよりもとにかく自分は将来満洲国の役人になるのだという思いが強かったです。また，いずれ軍隊に入るけれども，それまではとにかく学びながらお給料をもらえることは大きかったですね。行ってみてわかったのですけれども，満洲では本州に比して倍近いお給料をもらいまして，「これは有り難いな」と思いました。自分では使い切れませんでしたので，家族に送金しましたよ。兄弟もいましたから，家族もなかなか大変でしたしね。

問：日記を拝見して，東京から出発して，釜山を経由して新京まで行く部分を読みますと，「ひかり号に乗った」とありますね。

答：釜山からですね。

問：釜山からですね。「京城に行くまでは鮮系が多かった」と書いてあります。移動の際には「鮮系」や「満系」などの民族と接触していますが，それは人生で初めての経験でしたか。どんな印象でしたか。

答：「こういうところに私は行くのだな」と思いましたね。強く印象に残っていることがあります。臭いというわけではないですけれども，乗ったときに，何となく違ったにおいがしましたね。

問：ひかり号のときにですか。

答：そうです。「ああ，これはやはり日本の本土とは違うところに来たのだな」という感じがしましたね。そして，鮮系だとか，満系の人もいて，列車の中でも本当に色々な言葉が飛び交っていましたね。

問：ひかり号に乗られたときは，列車に等級はありましたか。日本人だけの車両があったりしましたか。

答：それはわかりませんでした。そういう高級な車両には乗る状況ではなかったですから，乗ったのはいわゆるエコノミーです。

問：2等車だったのですね。そうなると間近に現地の方を見る機会があったのですね。

答：色々な人が乗り合わせていましたしね。私は乗車当初は座れなかったのです。

問：日記にも最初は立っていたと書いてありますね。

答：立っていたところ，2～3人掛けの席に座っていた日本の親切なおばさんが「真ん中にお座り」と声をかけてくれたので，「いや，すいません」「お兄ちゃん，どこまで行くんですか」「実は初めてなのだけれども，満洲の新京というところに」「あら，これから遠いよ，座りなさいよ」という会話をしました（笑）。そして，途中でおばさんが降りる時に「ここで降りるからね，ゆっくりしてください」と言ってもらって，そこからはゆったりと座ることができて楽になりました。

（以下，次号）

註

1） 井上忠也（1979－1950）のこと。1932年に陸軍中将となり，1935年4月から1944年10月まで大同学院院長を務めた。

2） 北海道帝国大学附属土木専門部は札幌農学校を前身として1918年に設置された。卒業生には得業士の称号が与えられた。

3） 徴兵検査の予備検査を控えた1944年6月4日の日記には「明日ヨリハ日本男子トシテ一世一代ノ晴ノ場ニ臨ムナリ。準備，心構ヘヲ万端整ヘル」とある。『古川滋郎大同学院日記』1944年6月4日。以下，日記からの引用は日記名を特に記さない。

4） 2年現役制のうち，海軍所属の技術幹部候補生の養成制度のことである。

5） 野島延夫のこと。大同学院第17期生文集編集委員会編『旺なる吾等

――大同学院第 17 期生文集』大同学院第 17 期生会, 1983 年, 264–266 頁。

6） 4 月 12 日の日記には「コトニ技術官ト行政官トノ間ノ問題ニ就キ述ベラレタリ。即チ技術官ハ学識ヲ注意スベク，行政官ハ技術ヲ理解スベシト。実ニ同感ナリ。我々技術官ノ将来大イニ考フベキ事情ナリ」とある。

7） 古川滋郎「南嶺日記」『旺なる吾等』54–57 頁。